

## 45 障害者支援施設を利用している頸髄損傷者の呼吸機能と喫煙に関する実態調査

野田みゆき\* 烏山美弥\* 廣川愛美\*\*

(国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局自立訓練部)

\*自立支援局看護師 \*\*同センター病院内科医師

### 1. 研究目的

頸髄損傷者の死因の第一位は肺炎である<sup>1)</sup>。頸髄損傷者は痰の喀出困難により肺炎を併発することが多く、呼吸管理は重要である。喫煙の呼吸器に対する影響は周知のことであるが、国内における頸髄損傷者の喫煙の実態調査をした文献はないことから、今回、頸髄損傷者の呼吸機能と喫煙に関する実態を把握するために調査を実施した。

### 2. 研究方法

自立支援局を利用している頸髄損傷者 20 名を対象として呼吸機能測定とアンケート調査を実施した。

### 3. 結果

#### 1) 対象の属性

対象を喫煙群と非喫煙群に分けた。喫煙群は 11 名で平均年齢は 20 歳、受傷後の平均経過年数は 3.3 年であった。非喫煙群は 9 名で、平均年齢は 37.6 歳、受傷後の平均経過年数は 5.57 年であった。

#### 2) 呼吸機能及び酸素飽和度検査結果

喫煙群の肺活量の平均は 2.3(L) ± 1.0、非喫煙群 2.3(L) ± 0.6、一秒率は喫煙群で 48.3(%) ± 19.9、非喫煙群で 52.0(%) ± 14.9。t検定を行った結果、肺活量、一秒率など二群間に有意差は見られなかった。一般成人男性の肺活量は 4.4(L)である<sup>2)</sup>ことから、協力者の肺活量は 1/2 程度であることがわかった。また喫煙群の酸素飽和度は喫煙前・直後・5 分後ともに 95%以上で正常範囲内であり、喫煙による影響は見られなかった。

#### 3) 喫煙率、感冒時の呼吸状態や喫煙動機などについてのアンケート結果

一般成人男性の喫煙率は 36.8%であるのに対し、協力者の喫煙率は 55%であった。感冒時に「自力排痰ができない」「鼻をかめない」「咳ができない」「動くとき息切れ、動悸がする」という自覚症状は喫煙群と非喫煙群双方ともに自覚されていた。喫煙の動機は「何となく」「勧められて」「友達が吸っていたから」「好奇心」などであった。また、「健康に悪い」「吸いにくい環境になった」「タバコの値上げ」などの理由で 72%がこれまでに禁煙を試みていた。喫煙群 11 名中 3 名は「禁煙をしたいと思っている」と回答した。

### 4. 考察

結果から、喫煙群・非喫煙群に呼吸機能および呼吸器症状に有意差はなかったが、障害による影響はあきらかであった。また、喫煙率が一般成人男性に比べると、やや高い傾向がみられたことから、頸髄損傷者に対して、禁煙教育を継続して実施することが重要である。

### 引用文献

- 1) 内田竜生: 脊椎脊髄損傷者の生命予後と死因, 脊椎脊髄ジャーナル, 16(4), 2003, P 273-278.
- 2) 和田高士: 喫煙、過去喫煙、受動喫煙なしでの肺年齢, 臨床病理, 57:12, 2009, P 1159-1163.